

| | |
|------------------|---|
| Title | アーサー・ブリッグス編 チャーティスト研究 ; F. C. マーザー著 チャーティストの時代における公共秩序 |
| Sub Title | Chartist studies, ed. by Asa Briggs ; Public order in the age of the Chartists, by F. C. Mather |
| Author | 飯田, 鼎 |
| Publisher | 慶應義塾経済学会 |
| Publication year | 1960 |
| Jtitle | 三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.53, No.7 (1960. 7) ,p.652(78)- 656(82) |
| JaLC DOI | 10.14991/001.19600701-0078 |
| Abstract | |
| Notes | 書評 |
| Genre | Journal Article |
| URL | https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19600701-0078 |

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

アーサー・ブリッグス編

『チャーチスト研究』

(Chartist Studies, edited by Asa Briggs, 1959, London, pp. 421)

F・C・メーザー著

『チャーチストの時代における公共秩序』

(F. C. Mather: Public Order in the Age of the Chartists, 1959, vii+pp. 260)

最近のイギリスでは、十九世紀初頭の産業革命期にかんする社会経済史的研究が、相変らず盛んである。ここにとりあげた二者は、ともに、チャーチスト運動を主題としたものとして注目し値するが、ブリッグス編の「チャーチスト研究」は、九人の研究者による共同執筆であつて、従来のチャーチスト運動研究の成果を再検討し、それらの正確な評価の上に立ち、何よりも充分な資料的把握をもつて、産業革命の謎ともいべき大チャーチスト運動の真髓にせまらんとしている力作である。またメーザーの「チャーチストの時代における公共秩序」は、この時代における大衆的政治運動や労働者階級の革命的運動にたいする弾圧組織としての権力機構の状態、チャーチスト運動の期間を通じての警察制度の変化などをやはり厳密な資料的考察を通じて、きわめて生き生きと描いている。筆者はこれらの業績を通じて、イギリスにおいて精力的につづけられつつある若い

研究者の労働運動の歴史にたいする熾烈な関心をうかがい知ることができると同時に、チャーチストの時代をへだてること百数十年後の今日、わが国において、安保改定批准阻止のための請願や、大衆的な運動の未曾有の昂揚を前にして、感慨なきをえないのである。この意味において、チャーチスト運動は、およそイギリス社会運動史の研究に志す者にとって、ひとたびは手がけなければならぬテーマであり、英本国でも新しい研究がつきつきと出る理由のひとつであると思ふのである。まず前者についてその内容をみてみよう。

- 一、チャーチズムの地方的背景——アーサー・ブリッグス
- 二、マンチェスターにおけるチャーチズム——リーズ大学講師ドナルド・リード (現代史担当)
- 三、リーズにおけるチャーチズム——J・F・C・ハリソン (リーズ大学構外講演課)
- 四、リースターにおけるチャーチズム——J・F・C・ハリソン
- 五、サフォークにおけるチャーチズム——ヒュー・ファーン (ガーン大学補助幹事)
- 六、ソマーセットおよびウィルトシャーにおけるチャーチズム——R・B・ピュー (英国諸州ウィクトリア歴史編集者)
- 七、ウェールズにおけるチャーチズム——デイヴィッド・ウィリアムズ——ウェールズ大学教授 (ウェールズ史担当)
- 八、グラスゴウにおけるチャーチズム——アレックス・ウィルソン

ン (マンチェスター大学構外講演課)

九、全国的な方向——アーサー・ブリッグス

十、チャーチストの土地計画——ジョイ・マックエイスキル (オックスフォード大学、構外講演代表部)

十一、チャーチストと反穀物法連盟——ルイス・ブラウン——ハル大学教授 (歴史学担当)

十二、政府とチャーチストたち——サザンプトン大学講師 (歴史学担当)

原著は四百頁をこえる大冊であり、これを詳細に論評することは、原資料の閲覧がほとんど不可能であるわれわれにとつて、きわめて困難であるといわなければならない。従つて内容の概略的な紹介と問題の整理、あるいは分析視角の検討などに力を注ぐことになるであらう。

われわれはいままで、マーク・ホヴェル (Mark Hovell) の「チャーチスト運動」やガムメージ (R. M. Gammage) の「チャーチスト運動の歴史」、あるいはスロソン (Slisson) やローゼンブラット (Rosenblatt) やドレン (Edouard Dolléans) などの諸著を通じて、チャーチスト運動に接近するとき、運動の担い手と地域的特殊性として、(一) ロンドン——熟練労働者・独立小生産者・小商人、(二) バーミンガム——不熟練労働者・家内の小手工業者・小商人、(三) マンチェスター——工場労働者・手織工・半失業者などが、もっとも強調されているのに気がつくであらう。もちろん、これらの諸

地域およびそのそれぞれの地域の諸階層が、全体としてのチャーチスト運動にしめる重要性を指摘することは正しいし、またこれらの著者は、これらの三つの地帯以外の運動についても注目しているわけであるが、しかし何といつても、われわれは、ともすればチャーチスト運動の地域的特殊性を重要視する余り、運動の範囲をこの三つの地域に限定してしまうという誤謬をおかしがちである。しかし実際には、サフォーク、農業地帯ソマーセットやウィルトシャー地方にも、かなり活発な運動の展開が見られたこと、すなわちチャーチスト運動の地域的特殊性を、英国全体にかんする問題として捉え、本書が、従来まったく閑却されていたこの点を追求していることは、今迄にみられなかったことであり、今後のチャーチスト運動の研究にたいして大きな示唆をあたえることになる。本書の編者ブリッグスは、つぎのように書いている。「地方的な階級構成における変化——地方的な苦情の内容、政治的指導と大衆運動、チャーチスト自身とその反対者たちの適応性と永続性において——は、詳細な研究を必要とする。このような研究の材料と結論のいくつかのものを提供することが、この書に集められた地方的なチャーチズムにかんする論文の目的である。」と (p. 8)。そこでこの研究にはロンドンやバーミンガム、あるいはラダイツ運動の発祥地ノッチンガムには、あまりふれられておらず、もっぱら運動の支流と考えられていたリーズ、リースター、サフォーク、ソマーセット、ウェールズ、グラスゴウなどにむけられたのである。

ここにおさめられた十数篇の論文は、いずれも珠玉のようなすぐれたものであり、読んでいてまことに楽しいが、とくに当時の古い新聞や雑誌を縦横に駆使し、しかもそれらをきわめて適確に把握している姿は、日本のわれわれが、ノーザン・スターやマンチェスター・ガーディアンを覗くのさえ、なかなか困難であるのと比較するならば、まことに雲泥の差であって、外国の労働運動史の研究に志す者の限界というものを痛感させられるのである。それほどの重量感を、本書におさめられた共同研究は、たしかにもっていることはたしかである。ただ、ひとつ本書について筆者の意見をのべるならば、さきに指摘したように、この研究にあらわれている地方的特殊性の重要さを裏づけるための資料の克明さは、まことにおどろくべきものがある。しかしこの研究によって、チャーチスト運動の通説が、とくに覆えられたという点を見出すことはできない。なるほど各地方の運動の模様を描写については、類書に見られないほど詳細であり、注目すべきものを多くひそませてはいるけれども、しかしそれにもかかわらず、チャーチスト運動における「ひとつの謎」と呼ばれている「ニューポートの蜂起」についても、従来の説を大幅に修正したというよりは、通説をとりながら、それらを資料的に厳密に裏づけたのだといった方があたっている。しかしこれは本書の欠点というわけではなく、むしろ、英国全土にまたがったチャーチスト運動の個性の認識ということによって、運動の発展を、ロンドン・パーミンガム・マンチェスター、熟練労働者・家内工業者

工場労働者および手織工という直線的な理解にたいしては、非常に画期的な企図であるといっても過言ではあるまい。

一方これとは対照的に、メーザーの「チャーチストの時代における公共秩序」は、運動に対する中央政府および地方自治体の弾圧機構の研究として、興味ある労作である。本書の内容は、序論、第一章無秩序の挑戦、第二章權威のはしご、第三章民間警備隊(旧制度の警察、第四章民間警備隊(新制度の警察、第五章軍隊、第六章情報と秘密機関、第七章結論、である。

いかなる時代のどのような国の労働運動にたいしても、これを弾圧するために警察の補助部隊としてもっともしばしば用いられたものが軍隊であったことは、よく知られている。そして警察と同時にその軍隊を実際に動かした者は誰であったか。国内治安の最後のな責任者としての内務当局と、地方において、運動の凄惨な様子を実際に見聞する出先機関との関係、あるいはまた国内治安に比較的無関心な議会と内務当局との関係などについて、やはり適確な資料的分析の上に立って追求している。やはり本書も、批判という点では、筆者の能力のはるか外にあるので、問題点を指摘するにとどめたいと考える。

筆者はかねて、一八三〇年代の英国議会報告書をみて、あれほど大規模に展開され、そのためにおそらく世論も動揺したであろうと思われるチャーチストの騒擾については、比較的記録が少なく、むしろ新救貧法のことかたびたびでてくるのに、何か割りきれぬもの

を感じていた。しかし本書を読むことによってその疑問は氷解した。すなわち著者は、つぎのようにいう。「三年後、ブラッグ・プロットの騒動のときに、議会は、非干渉政策の態度を維持した。八月十二日、騒動がその最高潮に達したとき、立法府は、女王があるいは下院議長がいずれかの演説においても、国の状態にふれることなしに停会させられたのである。つぎの会期に、サウス・ウエールズの大部分の地域をおもって、恐怖と混乱とおしひろげた『レベッカの蜂起』も、議会では少しも討議されなかった。国内の騒動にたいする議会の無視は、それらが行政機関の固有の責任であるという想定にもとづいていたのみならず、政府の所在地から遠くはなれた地域におこったことだからである」と(p. 31, 但し傍点筆者)。

つぎにチャーチスト時代における内務省の役割について、著者の見解を要約してみることにしよう。著者によれば、内務当局の多くの仕事のうちでも、もっとも重要なものとして、(一)従属的な地位にある機関にたいする種の監督権、たとえば、州兵事官(Lord Lieutenant)の任命を推薦することや、あるいは州兵事官の推薦にもとづいて副兵事官を任命すること。(二)全国に駐在する治安判事の活動を統轄すること、そしてとくに首都警察とロンドンの軽罪裁判所の治安判事は、内務省の直接の支配のもとにあった。(三)このような純粹に諮問機能的な機能に加えて、内務省は、地方当局が財政逼迫の状態におちいったとき、その自由にしうる莫大な金銭、物質および権限をもって、これを援助する義務を負っていた(pp. 36-38)。

しかしこうした職務を遂行する内務当局も、大臣に誰がなるかによって、そのチャーチスト運動にたいする政策において容易に異なるらざるをえない。著者はこれについて、市民的自由を奪ってまでもチャーチストを弾圧しようとするに反対な自由主義者ラッセル卿と、彼の後を襲ったが、悲観主義者であり、ラッセルの「英国人民の良識と徳にたいする信頼」など少しも持ち合せていないグレーアム卿とを対比せしめ、さらに下部機関との関係についてふれている。英国の地方行政単位は州であって、州兵事官と高等執行官(High Sheriff)とが、騒動の鎮圧の責任をもっていた。しかし実質的にチャーチストの騒擾の鎮圧に大きな役割を果たしたのは代理執行官であったといわれる(p. 38)。イングランドでもスコットランドでも、地方において、治安の面に非常に強大な権限をもっていたのは州兵事官であり、州治安判事や代理兵事官の任命の如きも、その自由にするところであった。問題は州義勇農騎兵がその指揮下にあった点は重要である。チャーチスト運動が、いたるところで弾圧され、障害につき当たったのは、それが、内務当局の方針というよりは、州兵事官の積極派の活躍によるものであることが明らかになるといえる。

以上のように著者は、権力機構を立体的に観察し、チャーチスト運動が、いかにその組織された力によって弾圧されたかを、きわめて鮮明に描いている。

本書を読んで感ずることは、前者と同じく、やはり完璧な資料の

把握であろう。ただ、チャーチスト運動と権力機構とを機械的に對比させたような感じをあたえる叙述が目立ち、弾圧機関の内部的関連の分析のみが詳細をきわめ、両者の関係を有機的に把えていないように感じた。しかし最近書かれたチャーチスト運動の研究書なから、これほど熾烈な問題意識をもって書かれた著作は稀であり、チャーチスト運動の隠された面を追求するのに役立つであろう。

(飯田 豊)

中山伊知郎 共著
南 亮 進

『適度人口』

私はこの書を高く評価したいとおもう。人口理論としてまとめられた従来の文献は、多くは人口理論一般を述べたものであったが、人口の適度概念に課題をもとめて、これを体系的にまとめた著書は外国書においても数少ない。

本書は『適度人口理論』と『人口の適正成長率理論』の二編からなる。第一編はキャナン・リードを中心とする最近時の適度人口理論展開の紹介と、それに対する批判にあてられる。補論としてマルサスの収獲法則、J・S・ミル、J・ヴォルフ、ウィクゼル、ダルトン、アモン、フェアチャイルド等の適度人口理論の紹介をつけ加

えている。第二編では、ケインジャンの人口理論が論じられる。ケインズ・ロビンソンは人口減退を長期停滞の主要原因とみなし、経済成長に人口増加を要請した。これが理論的展開をみたのはハロッド・ロビンソンの長期動態理論である。ここに新たな人口の適度概念が生れる。

ここで本論の主要内容を簡単に紹介すると、第一編では、一人当り生産量の極大点をもって人口の適度点と解したキャナンの所説を生産函数を用いて再構成し、労働の限界生産力と平均生産力が一致する人口、すなわち労働の生産弾力性が一にひとしい人口が適度人口であること。さらに、キャナンが静態的適度理論から「人口の正しい運動」という動態的理論に達した事情を述べている。また、ミードの適度人口概念は所得が平等に分配された状態において、社会の総厚生を極大にする人口である。すなわち労働の限界生産力が最低生活水準に一致するとき、社会的余剰(社会的厚生)が極大になる(この点はキャナンの適度点よりも人口量ははるかに大きい)。さらにミードは資本についても適度概念の存在することを述べ、資本の限界生産力がゼロの点を「適度資本」とするとし、適度資本が適度人口と同時に成立する状態を「人口と資本の絶対的適度」と呼んだ。しかし、この内容についての問題点としては、適度理論という静態理論のなかに動態的な貯蓄・投資概念を導入したことから生じたことを指摘し、批判を加えている(七九―八五頁)。そして「適度人口理論はマルサス流の悲観的人口思想とスミス流の楽観的な人

口思想との結合の結果であった」(二〇二頁)と端的に述べる。

第二編ではまず、ケインズが一九二〇年代までは古典派経済学者として、マルサスの過剰人口を主張した事情を『平和の経済的帰結』(一九一九年)を中心に描写する。一九三〇年代にいたり、マルサスの有効需要原理に関心をうばわれたケインズが、マルサスを師と仰ぎ『人口論』から『経済学原理』へ、すなわち「人口の原理」から

態論において、ハロッド(動態経済学)においては自然成長率 G_n が適正成長率 G_0 に等しいとき、また、ロビンソン(資本蓄積論)においては、自然成長率 G_n が資本蓄積率 G_s に等しいとき、そのときの人口成長率は人口の適正成長率であるとの結論がえられる。

「有効需要の原理」へ移行した推移を述べる。『一般理論』(一九三六年)はマルサスに対する再評価を理論的に確立したものであったが、この『一般理論』を長期化し、人口成長の意義を論じたのは翌一九三七年の『人口減退の若干の経済的帰結』であった。そのなかの一節「われわれはいまや少なくともマルサスの悪魔と同様に恐ろしいいま一つの悪魔、すなわち有効需要の破壊を通して逃亡する失業の悪魔が身近にあることを知った……人口の悪魔Pが鎖につながれるとき、われわれは一つの脅威から解放される。しかしわれわれは以前にもまして、資源の不完全利用という他の悪魔Uの脅威にさらされる。」というなかに、われわれは有効需要を通じてえられる経済発展の主要因として、人口増加の意義を見失ってはならないのである。かくして、二つの悪魔PとUは、前者が静態的な適度人口に対応する人口過剰であるのに対し、後者は動態的な人口の適正成長率に対応する過小人口成長率の問題である。ここに新たな人口理論の展開をみるにいたったのである。すなわち、ケインズ・ロビンソンを中心とする長期停滞論を経て、ハロッド・ロビンソンの長期動

これらの体系的展開を通じて、最終的結論とするところは、ケインズ革命以前の適度理論は、人口Pの変化が与える生産力効果であり、これを人口の生産力効果と呼ぶ。ケインズ・ロビンソンの長期停滞論においては、有効需要を通じて投資需要を規定する人口は、人口の増分 ΔP である。これを人口の有効需要効果と呼ぶ。そして人口の生産力効果にもとづく貯蓄の増加と、人口の有効需要効果にもとづく投資の増加とが一致するとき、経済の長期的均衡が維持され、経済の調和的發展が可能となる。これが人口の適正成長率 $\Delta P/P$ であり、ハロッド・ロビンソンによって展開された長期動態論から導き出された適度概念である。すなわち、人口の適度理論に関してケインジャンによって展開された動態的な人口成長理論は、ケインズ革命以前の人口理論とケインズによって明らかにされた人口成長の効果とが、たぐみに総合されているということである。かくして近代経済学の体系的なかに、人口という変動要因のおよぼす効果をもとめ、それを体系的に展開しまとめたところに、この書を高く評価したいとおもう本質的理由を見出すのである。

さて、本書を要約した紹介をこれにとどめ、つぎに若干の批評に